

これまで『古事記』を勉強してきたまとめとして

①『古事記』—無文字文化と文字文化の接点の作品—美術史を『古事記』から読み直す試み

『古事記』は、それまで<声>で伝えてきた國と神の物語を<文字>に変えて遺そうとした最初の仕事。

「創世紀」は<接点>の作品ではない。すでに文字文化がある程度成熟したレベルで編まれた聖典である。神の名を<声>として発語したとしても、<文字>で表記する場合は略号「YHWH」を使って記録するなど、高度な技術を会得している。

『古事記』の神代篇の前半では、こういう高度な記号化の技術は観察出来ない。

それは、古代倭言葉の<声>を大陸由来の漢字を借りて文字化しようとした。<声>の形化の試み。

○出来事の陳述は、漢文（大陸文字文法）に依存した。

○擬音や神々、国の名（固有名）を、漢字（大陸文字）の<音>を借りて（六義の「仮借」の方法）で表記しようとした。こうして、

<声>→<文字という形>→<記号としての音声>制作という文字文化経験を蓄積していった。

（<音>は人工的 artificial 所産。外部の力による加工物。<声>は身体内発的 instinctive & intuitive）。

その過程で、ふたつの原則を混在させ矛盾対立と考えない思考が成熟していった。（<二軸思考>の成熟）

○<声>には土着感性、<文字>に外来思想を預ける方法が浸透定着。→書記における<漢文×仮名>体制の確立。<二軸>思考（<無文字文化>と<文字文化>という二つの文化が共存する）の開花。

②<二軸楕円>思考の成熟

<二軸>思考（思想と呼ばないで思考と呼ぶ。それほど列島生活者には慣習となっている）

例：「創世紀」の冒頭句「神は始めに天と地を創造した」の「天と地 the heaven and the earth」を日本語訳聖書では「天地（あめつち、てんち）」と訳している版があること。「天と地」と訳している場合も、「と」を入れなければ誤訳だという意識は日本の聖書学者にはなさそうである [⑤へ]。それくらい東アジア列島人には「天地」は一体と受け止めて自然なのである。欧文脈では、かならず and が入って「天」と「地」は<二項対立>思考の枠の中に捉えられている。

そのほか、列島人は、自分の名前をいくつも持つことに自己分裂を感じない。呼ばれるときも同様。画号その他むしろ別の名前を積極的に持とうとすらすらする。

「ジキルとハイド」のような一人の人間のなかの人格の対立現象を認めない。対立ではなく「憑依（つく）」という形をとる。

「和魂漢才」から「和魂洋才」へ。「唐絵×倭絵」、「漢画×大和絵」、「洋画×日本画」etc.

③「天地」と神々、國々が誕生する様子の原像を植物の生成に拠っている

当時の植物観は現代とは違う。当時は、植物と動物を分類する知識は持ち合わせていなかった。

「人」に関しても、身体と靈魂から成り立っていると考えていた（大陸の「魂と魄」を<二軸>思考に）。

人間の活動は、原始、<触><聴><視>の機能を混成させて、認識した。

<触>→玉、土偶土器（神々と人間の形） <聴>→擬音表記 <視>→形態色彩判別。

触と聴の分離、視の独立。三つの身体機能の精錬が<芸能>と<道具>を発展させる。

④ 語りから記述への過程の底に流れている人間の欲望の姿

<美>への欲望と<利>への欲望（<二軸>の揺れ）。<利>は<美>が<触・聴・視>の機能を分類させる。

初代の神々が求めた<美>が次第に<利>に絡み取られて行くようすが『古事記』に読み取れる。

⑤日本列島の<文字文化>は、<無文字文化>の遺産によって生きている。

<二軸楕円形>思考を働かせている<自己 vs 他者>問題。（<自己>とはなにかという問いに向かって）